世間解　第四三一号
令和六（二〇二四）年　一月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―摂取不捨　その三―

新しい歳を迎えました。皆さまにはそれぞれの日暮らしの中、「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」と、ご本願のおはたらきであるお念仏ご相続のことと存じます。

摂取不捨ということをお聞かせいただいております。

かの仏の光明は無量にして十方国を照らすに障礙するところなし。ただ念仏の衆生を観そなはして、摂取して捨てたまはざるがゆゑに阿弥陀と名づけたてまつる。

善導大師さまの『往生礼讃』というお聖教のご法語であります。漢文では「唯観念仏衆生摂取不捨故名阿弥陀」とおっしゃっています。

念仏の衆生を摂め取ってお捨てになることがない、だから阿弥陀さまと申しあげるのだというお言葉であります。

「摂取不捨　故名阿弥陀」

阿弥陀さまというお名前と摂取不捨というおはたらきは全く同じであるとおっしゃるのであります。

阿弥陀さまのお名前のおいわれは『仏説阿弥陀経』というお経さまに詳しく説かれています。

お釈迦さまが舎利弗というお弟子に諄々と阿弥陀さまやお浄土のありさまを説かれるお経さまであります。『阿弥陀経』さまのまんなかあたりに、

舎利弗、なんぢが意においていかん。かの仏をなんがゆゑぞ阿弥陀と号する舎利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙するところなし、このゆゑに号して阿弥陀とす。また舎利弗、かの仏の寿命およびその人民［の寿命］も無量無辺阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく。

というお言葉があり、ここに阿弥陀さまのお名前のおいわれが説かれています。

まずお釈迦さまが舎利弗尊者に「なんぢが意においていかん。（舎利弗よそなたはどのように思うか）」「かの仏をなんがゆゑぞ阿弥陀と号する（あの仏さまをなぜ阿弥陀さまともうしあげるのか）」とお尋ねになります。舎利弗は黙してお聞きになっています。お釈迦さまは続けて「かの仏の光明無量にして（あの如来さまの光明は限りなく）」そして「かの仏の寿命およびその人民［の寿命］も無量無辺阿僧祇劫なり。（あの如来さまの寿命やお浄土に生まれた者の寿命も量り知ることは出来ない）」そういうお徳をお持ちだから「ゆゑに阿弥陀と名づく（阿弥陀さまと申しあげるのだよ）」

と、ここに「光明無量（限りのない光のお徳）」そして「寿命無量（限りのない“いのち”のはたらき）」という二つのおいわれがあるのでこの如来さまを“阿弥陀さま”と申しあげるのだよとお釈迦さまはお教えくださるのであります。

光明とは私に覚りをひらかせてみせるという智慧のお徳を、寿命は一切の“いのち”を決して漏らすことがないという慈悲のお徳をあらわします。

光明無量とは例えばお日さまの光があらゆる処にくまなく届くように阿弥陀さまの救いのおはたらきは届かないところがないということで“どこでも”ということ。寿命無量とは阿弥陀さまの救いのおはたらきは途切れることがないということで“いつでも”ということであるとお教えをいただきました。

山本仏骨という和上さまは、「“いつでも”“どこでも”と聞いたら理屈をいう人はすぐに『それは何時ですか、それは何処のことですか？』と詮索するでしょう。そんな聞き方しておったらいかんのよ！」とおっしゃっていました。そして、「“いつでも”“どこでも”と聞いたら“いま”“ここで”と安心させていただいたらええんです」とお教えくださるのであります。阿弥陀仏というお名前そのものが阿弥陀さまのお救いのおはたらきなのであります。

“なもあみだぶつさま”は〈おまじない〉でも〈呪文〉でも私が唱えたら何とかしてくださるだろうという引き換えとしての〈気なぐさめ〉でもありません。

私の口からでてくださる“なもあみだぶつさま”は阿弥陀さまの“必ず支えているよ”“どんな事があっても支えているよ”“いつも一緒に護っているよ”という何時でも何処でもという摂取不捨のおはたらきそのものなのであります。合掌